

双葉町

復興まちづくり計画(第四次)

基本構想(案)

双葉ではじめる

～ ワクワクする 暮らし・学び・挑戦 ～

安心して暮らせる土台を整え、双葉町に関わるすべての人とともに、
人の営みを原動力に、学びと挑戦が日常にあふれる双葉町を目指して復興を進めていきます



基本構想

第1章 計画の概要

1. 策定の趣旨（目的・位置づけ）
2. 計画の構成と期間
3. 計画策定の考え方（町民・事業者等との対話を通じた策定）

第2章 双葉町の概要と取り巻く社会潮流

1. 双葉町の概要と現状（データ等で見た町の現状）
2. これまでの復興の歩み
3. 第三次復興まちづくり計画の評価（町民アンケート結果）
⇒キーワード：住まい（住宅の確保・町内定住支援）暮らし（買い物・飲食）しごと（就労支援）医療体制、こども・若者支援（教育・子育て）、交流・情報発信
4. 双葉町の特長（町の強み・魅力）⇒町への誇り・愛着（震災前の街並みを活かしたまちづくり）
5. 双葉町を取り巻く社会潮流（廃炉・除染等国の動き／技術革新／価値観・ライフスタイルの変化など）
6. まちづくりの課題

第3章 まちづくりの将来像・目指すまちの姿

- ・基本理念・基本目標
- ・将来像を実現するうえで大切な考え方（基本姿勢）（みんなでつくる双葉／双葉らしさ／未来へのまなざし）
- ・町外で生活されている町民のみなさんへ
- ・双葉町のブランドの方向性
- ・土地利用構想
⇒駅周辺（駅西・駅東）／中野地区／6号以東／農業エリア／特定帰還居住区域、その他帰還困難区域
※関連して、町有地の利活用方針（所有・売却等の基本方針と大規模町有地の活用方針）を記載
- ・将来目標人口

基本計画

（詳細は令和8年度検討）

施策体系

第1章 分野別基本施策

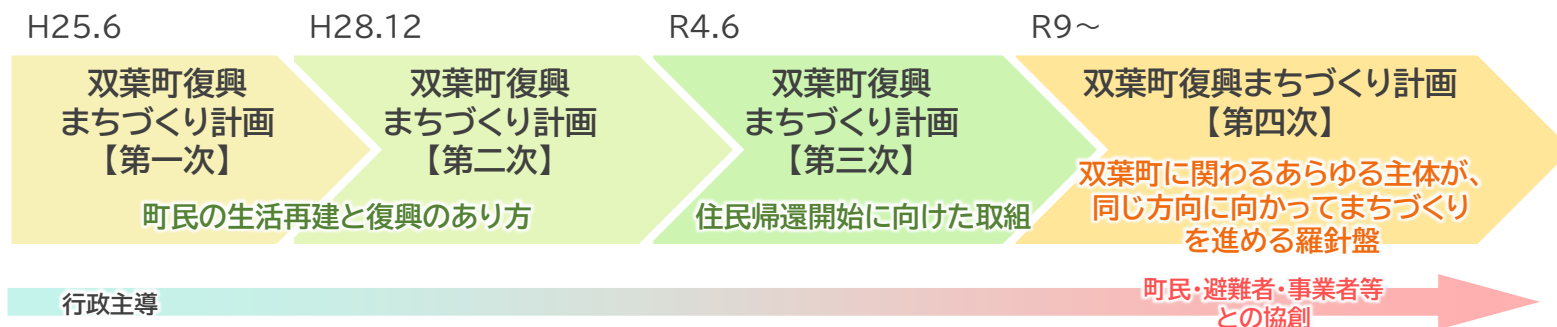
第2章 総合戦略

第3章 計画の推進体制と進行管理

実施計画（詳細は令和8年度検討）

計画策定の目的

- これまで、一次計画・二次計画では、避難を余儀なくされた町民のみなさんの生活再建と、帰還に向けた方針の整理に取り組んできました。三次計画では、特定復興再生拠点区域の避難指示解除と住民帰還の開始を見据え、除染やインフラ復旧、生活環境の整備等を進めてきました。
- 令和4年8月に避難指示区域の一部が解除され、町内での本格的な復興が動き出しています。一方で、双葉町の復興は、住まい・なりわい・教育・医療福祉・コミュニティなど、暮らしを成り立たせる要素を段階的に整えていく必要があるなど、多くの課題が残っています。
- こうした状況のもと、先人から受け継いだ双葉町を、これからも「住み続けたい」「関わり続けたい」と思えるまちとしていくためには、行政だけでなく、町内で暮らす人、町外で生活する町民のみなさん、町で活動する事業者や団体、町に関わる企業・大学等、観光やイベント等で訪れる人など、多様な主体がそれぞれの立場で知恵と力を持ち寄り、協力しながらまちづくりを進めていくことが欠かせません。
- このため、四次計画は、双葉町に関わる多様な主体が、策定の段階から情報を共有し、めざす将来像と取組の方向性を確認しながら、同じ方向に向かって歩みを進めていくための指針（羅針盤）として策定します。



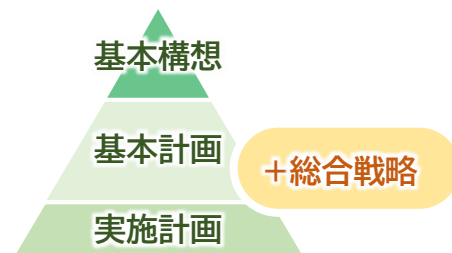
計画策定の考え方

対話で描く

- 町民や事業者をはじめ双葉町に関わる様々な人との対話を通じて計画策定を進めることで、町に関わる全ての人々が計画を「自分ごと」と捉え、それぞれの主体的な活動により計画の推進につなげる。

計画の構成

- 復興まちづくり計画（第四次）は「基本構想」「基本計画」「実施計画」で構成する。
- これまでの復興の流れを踏まえつつ、帰還・移住したくなるまちづくりの着実な推進に向けて策定する「総合戦略」は、復興まちづくり計画（第四次）の基本計画に統合し、一体の計画として進行管理を行う。



基本構想

- 目指す将来や実現に向けた目標、施策の基本方針など、これからの復興まちづくりの基本的な考え方を示す。

基本計画

- 基本構想に掲げた施策の基本方針に沿って取り組むべき施策を総合的に示す。
- 総合戦略は重点プロジェクトとして基本計画と一体的に作成する。

実施計画

- 基本計画に沿って具体的な事業を定める。評価検証と見直しができる仕組みを構築し、効果的に事業を実施する。

計画の期間

- 基本構想は令和9年度から令和18年度までの10年間とする。
- 基本計画は社会情勢の変化に柔軟に対応するため、計画期間を前期と後期（各5年間）に区分する。
- 実施計画は計画期間を3年間とし、毎年度ローリング方式により見直していく。

双葉町の歴史

- 古代には清戸迫横穴が造られ、奈良時代以降は郡衙(郡山地区)が置かれた。近世では中村藩の陣屋(長塚地区)が置かれるなど古来より標葉郡の政治的な中心地の一つ。
- 中村藩では18世紀後半から19世紀初頭にかけて飢饉や自然災害が多発し、人口が大幅に減少。その際、北陸から浄土真宗門徒の移民受入と、報徳仕法による産業復興と財政再建を図り、双葉町域にもその名残がある。
- 1923年に双葉郡初の県立普通中学校(後の県立双葉高校)が設立。「文教のまち」と呼ばれる。
- 戦前の1941年に整備された磐城陸軍飛行場の跡地は戦後、塩田、原子力発電所用地として活用された。
- 東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故により全町避難。2022年に特定復興再生拠点区域全域の避難指示が解除され住民の帰還が実現。

双葉町の文化

- 中村藩7郷の1つとして、相馬野馬追の歴史が残る。初發神社の御祭神、妙見大明神は中村藩主相馬氏の氏神。
- ダルマ市はおよそ300年前から続くとされる。七転び八起きの意味をもつダルマは東日本大震災と原発事故の被害を受けた双葉町の復興のシンボルとなった。
- 前田稻荷神社(農業・商売の神)の御神木として、樹齢1,000年を超えるという前田の大杉が存在。
- 神楽や盆踊り、じゃんがら念仏踊り、せんだん太鼓など、多くの町民が参加する催しを盛んに開催。

これまでの復興の歩み

- 2017年 復興に向けた道すじができる(特定復興再生拠点区域の設定)
- 2020年 町へのアクセス手段と拠点施設の整備(常磐双葉IC、JR双葉駅新駅舎、東日本大震災・原子力災害伝承館、双葉町産業交流センター)
- 2022年 帰還開始(特定復興再生拠点区域の避難指示解除、双葉町役場新庁舎の開庁、駅西住宅の整備)
- 2023年 生活再建の開始(浅野燃糸・フタバスーパーゼロミル、ファミリーマートの出店)
- 2024年 移住定住相談センター(旧三宮堂田中医院)開所、双葉花火大会やふたばフードフェス開催
- 2025年 FUTAHOME、イオン双葉店がオープン

その他記載事項

- 双葉町を取り巻く現状・社会情勢
- 第三次復興まちづくり計画の評価

基本理念

キャッチコピー

双葉ではじめる ～ ワクワクする暮らし・学び・挑戦 ～

キーフレーズ

安心して暮らせる土台を整え、双葉町に関わるすべての人とともに、人の営みを原動力に、学びと挑戦が日常にあふれる双葉町を目指して復興を進める。

背景・狙い

- 復興への想い**
 - 原発事故に伴う全町避難を経て、避難指示の一部解除が進み、町内で再び暮らしを営むための土壌が少しずつ整い始めました。この土壌に彩りを添えるのが、自分らしい暮らしや学び、仕事、そして挑戦といった人の営みです。双葉町で暮らすこと、学ぶこと、挑戦することなどを自ら選び、この地で新たな生活をスタートさせる人を一人でも増やしていくために、町は一つひとつの取組を着実に積み重ねていきます。
- 基本的取組**
 - 安心して暮らせる環境づくりを着実に進めつつ、かつて人を育て地域を支えてきた「文教のまち」の誇りを継承し、子どもから大人まで学びの機会をひらくとともに、舞台となる挑戦の機会と場を広げて、一人ひとりの可能性を引き出していきます。
- 目指す状態**
 - 町内外で暮らす町民のみなさん、事業者、学生、双葉町を訪れる方々。双葉町に関わるすべての人が、自分らしい日々の暮らしや関わり、さらには夢や目標に向かって一歩を踏み出し、それが次の一歩の背中を押していく。そんな一人ひとりの歩みから、町の未来を切り拓く「はじめる」が次々と生まれ続ける、ワクワクする町を目指します。

役割

キャッチコピー

- 計画の“顔”として、町内外に合言葉を示す。まず関心を引き、共感を生み、覚えてもらう。

キーフレーズ

- キャッチコピーに込めた思いを、行政計画として誤解なく一文で言い切る。

背景・狙い

- キーフレーズをさらに補足するものとして、「なぜ“はじめる”なのか」「“ワクワクする暮らし・学び・挑戦”とは何を指すか」を、短い背景と文脈で説明し、具体的な将来像がイメージできるようにする。

各基本目標の概要

安全で

住みよいまち

- ① コンパクトなまちづくりを目指し、駅周辺を中心に日々の暮らしに必要な都市機能の集約を進めるとともに、多世代・多様なライフスタイルに対応できる住まいの選択肢と、周辺の生活環境を整える。
- ② 町内外の移動がしやすい交通環境を整備し、一人ひとりに必要なサービスへ無理なくつながれることで、全ての世代が安心して暮らせる、利便性・快適性の高い暮らしを実現する。
- ③ 災害・犯罪等から人命や生活を守る備えをし、安全・安心な暮らしを支える。

関連 施策

主に①:生活インフラ/住まい・暮らし/商工/健康・医療・福祉/こども・子育て/エネルギー

主に②:公共交通

主に③:防災・防犯



コンパクトなまちづくり

学び・文化が 広がるまち

- ① 町全体を学びの場とし、教育施設における英語を基盤とした多様な学びと、その他の公共施設など地域での交流を通じた学びを通じて、大人から子どもまで、新たな学びに出会い、新しい発想で様々なことに踏み出せる力を育む。町への誇りと愛着を胸に、次世代が双葉で、そして世界中で活躍できる人材を育成する。
- ② 双葉町の自然、歴史・伝統、文化・芸術に日常的に触れられる機会を充実させ、世代を超えた交流が生まれる場をつくり、自分らしい豊かな暮らしの実感を次世代へ継承する。
- ③ 震災の記憶と教訓を世界の人々に伝え、次世代へと伝承する。

関連 施策

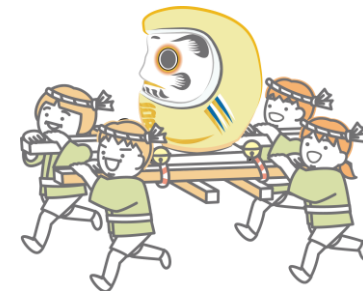
主に①:教育・学び/人材育成

主に②:スポーツ/歴史・伝統・文化・芸術

主に③:震災伝承



大人から子どもまでの新たな学び



町の歴史・伝統、文化を通じた交流

挑戦が生まれるまち

- ① 多様な人材がそれぞれのライフスタイルの中で能力を発揮できるよう、挑戦の機会と場を整備し、起業・創業等の夢・目標の実現だけでなく、地域課題の解決や日々の暮らしをより良くする小さな実践を後押しする。
- ② 農業の再生をはじめ、地域産業の継承・発展と付加価値の高い事業・商品・サービスの実現に向けて、多様で魅力的な産業や雇用の創出・育成を支援する。
- ③ 廃炉に向けた歩みの着実な推進を支援するため、廃炉作業に係る人材育成、研究開発を世界中の叡智を結集して進めていく。

関連施策

主に①③:創生・活性化／研究／移住／人材育成(再掲)
主に②:農業／産業・起業創業／企業誘致



日々の暮らしをより良くする
小さな実践・挑戦

いきいきと健やかなまち

- ・誰もが尊重され、住み慣れた地域の中で居場所や役割を持ち、世代を超えて支え合いながら自分らしく暮らせるよう、医療・福祉・健康づくりの取組を進め、生涯にわたり、いきいきと活躍できる安心のある暮らしを実現する。

関連施策

健康・医療・福祉(再掲)／地域活動／多様性(人権、多文化共生、男女共同参画など)／
防災・防犯(再掲)



いきいきと活躍できる
安心ある暮らし

関わりあえるまち

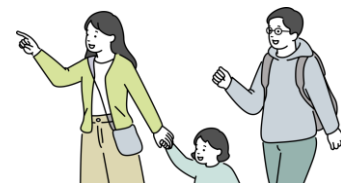
- ・ライフスタイルや価値観の変化に対応し、住むことだけに限らない多様な関わり方の機会を増やし、町外で生活している町民をはじめ、移住検討者、観光やイベント等の来訪者、企業・大学等が町内の人や場とつながり、関係が続いていく仕組みを整える。
- ・歴史文化や自然、町民の想い・営みなどの魅力の発信を通じて、双葉町に興味や愛着を持ち、住む・訪れる・関わる人の輪が広がることを目指す。

関連施策

帰還・移住／絆・交流／関係人口／シティプロモーション／観光



町の話聞く 町の情報を知る



町を訪れ、楽しむ

将来像を実現するうえで大切な考え方(基本姿勢)

- 将来像の実現に向けてまちづくりを進めていくうえで、どの分野においても常に意識すべき大切な考え方を位置づけ、まちづくりに取り組みます。

みんなで つくる双葉

- 双葉に関わるすべての人が、それぞれの立場で自分ごととしてまちに関わり、対話を重ねながら、まちをつくり育てていくことを大切にします。
- 町が基盤となる環境づくりや仕組みづくりを進めながら、町民、町外で関わる人、民間事業者・団体など、多様な主体が力を発揮し、それぞれの役割を担いながら関わり続けられるまちを目指します。

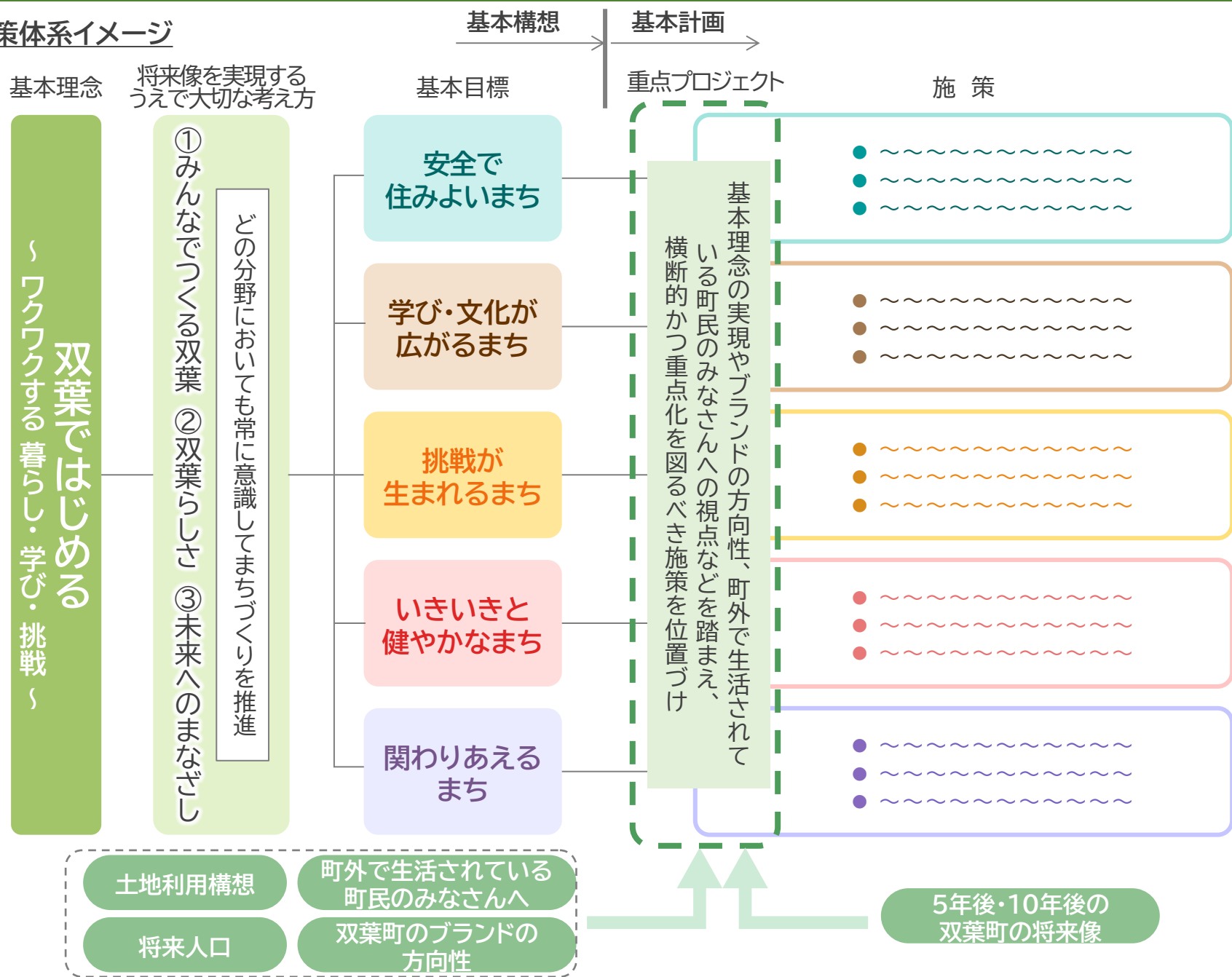
双葉らしさ

- 双葉町の魅力や価値を「双葉らしさ」として掘り起こし、磨き上げ、分かりやすく伝えていきます。
- 一人ひとりが双葉に誇りや愛着を感じながら、町外の人にも「関わりたい」「訪れたい」「住みたい」と思ってもらえるきっかけを広げ、つながりの広がりをまちの力につなげていきます。

未来への まなざし

- 将来にわたって持続可能なまちであり続けるために、限られた資源を活かしながら、効率的で効果的なまちづくりを進めていきます。
- 社会や暮らしの変化に応じて柔軟に見直しを行いながら、デジタル技術の活用や脱炭素社会の実現なども取り入れ、それぞれの暮らしやニーズに合った取組を進めていきます。

施策体系イメージ



みなさんへのまちの想い

- みなさんの生活事情は一人ひとり異なり、関わり方も様々です。だからこそ、帰還の有無にかかわらず、双葉町と多様な形でつながりを持ち続け、居場所や役割を見いだせる関係を大切にしたいと考えています。
- 町の復興とともに進めるパートナーとして、行事や交流、町内での活動などを通じて双葉町に関わる機会を広げるとともに、進学、就職、結婚、子育て、定年後の暮らしなど、みなさんがそれぞれのライフステージの節目で、双葉町との関わりを選べるようにしていきます。

関わり方の入口



- 双葉町の情報に触れる・交流する



- 双葉町の商品を購入する

行き来する関わり



- 双葉町を訪問する
- 祭り・イベントに参加する
- お試し居住をする



- 双葉町で活動を企画・実施する

暮らしに根差した関わり



- 双葉町にも拠点を設けて二地域居住、ワーケーション



- 双葉町で生活を営む



- 土地や住宅、農地の活用を通じて、双葉町の住まいや法人等による営農を支える

多様な双葉町との関わり方

双葉町との
多様な関わり方

町への関わり方と、現在の町の取組

- 町外で生活されている町民のみなさんが双葉町とつながり続けるための関わり方と、それを支える現在の町の取組を整理しました。

	関わり方	現在の町の取組
遠くから	情報を受け取る／近況を知る	<ul style="list-style-type: none"> 様々な媒体による広報
	声を届ける(意見・参加)	<ul style="list-style-type: none"> 町政懇談会 住民意向調査
	応援する/つながる	<ul style="list-style-type: none"> 土産物・特産品の情報発信
ときどき訪れる	行事・交流に参加する	<ul style="list-style-type: none"> お祭り・イベントの実施
		<ul style="list-style-type: none"> はたちを祝う会等
町に拠点を置く	暮らしを再開する	<ul style="list-style-type: none"> 町営住宅の整備 住宅再建支援 帰還に伴う移転費用支援
		<ul style="list-style-type: none"> 事業再開等支援
	なりわいの再生	<ul style="list-style-type: none"> 営農再開等支援

- 広報ふたばや、SNSなどでの情報発信
- 避難先で町民の率直な意見や要望等伺う
- 帰還意向の確認、帰還に必要な取組を伺う
- 双葉ダルマなど土産物・特産品の情報発信
- ダルマ市や町民体育祭などの行事の実施
- 町内での式典と町内ツアーの実施
- 帰還する町民用の公営住宅を整備
- 町内の住宅再建や避難前に町内に所在する住宅で居住する場合の清掃費用等の支援
- 帰還に伴う移転費用の支援
- 双葉町商工会と連携した事業再開支援、税の特例制度の周知
- 営農再開に向けた基盤整備、農業者に対する支援など

今後の検討課題

- ・ 今後は、町外で暮らす町民のみなさんのニーズを確認しながら、関わり方の選択肢が増えるよう、受入環境や情報提供のあり方を整理し、段階的に取り組みを進めていきます。

デジタルを活用して、カジュアルなかたちで町に対して提案を寄せられる機会をつくる

スポーツ大会など、若者が参加する場で町に対して提案を寄せられる機会をつくる

夏休みや年末年始などのタイミングで町内で滞在できるよう、二拠点居住しやすい環境を整備

町出身者が町での挑戦や活動に踏み出しやすくなるよう、企業や団体とも連携し相談体制や機会づくり、受入環境を充実

町外で生活されている町民の想い・望む関わり方

住民意向調査 (復興庁等)

- ・ 帰還意向は回答者の16.6%(帰還済含む)
- ・ 年齢別帰還意向は、10～20代、50代、60代は3割前後、30～40代は2割程度
- ・ 帰還する場合の家族は全員よりも家族の一部での帰還意向の方が割合が高い
- ・ 帰還しない理由は、避難先での居住意向や自宅が解体済、医療環境への不安への割合が高い
- ・ 「まだ判断がつかない」「戻らないと決めている」と回答した方の約7割が、双葉町との「つながり」を保ちたいと回答

町民調査 (復興まちづくり計画)

- ・ 今後の重要度の高いまちづくりとして、町外で生活されている方は「観光」や「歴史・文化」の割合が全体より高く、多様な形で町との関わり・誇りを感じたいという意向がある。

ワーク ショップ (主な意見)

- ・ ワークショップに来られない人の意見を拾うことも大事
- ・ 震災前よりもっといいまちにしてほしい。
- ・ 文化の伝承・活動を継続してほしい。
- ・ 日常的に関われる場や、スタートアップへのサポートなどを充実して帰還しやすい町にしてほしい。

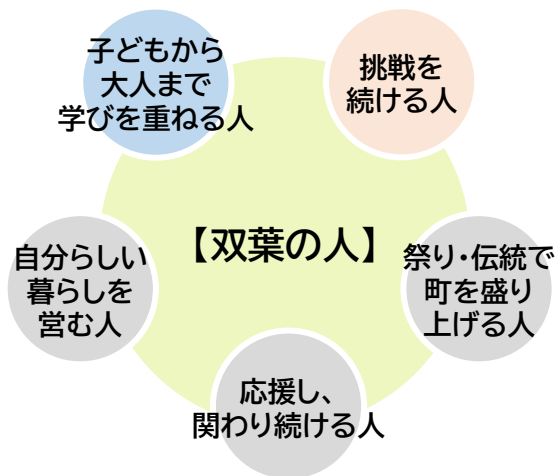
ブランドの狙いと今後

- 双葉町がこれから「選ばれるまち」になるためには、復興の進捗や施設整備といったハード面にとどまらず、町の独自の価値をわかりやすく示し、町内外の人や企業が「ここで暮らしたい・関わりたい」と感じる理由をつくる必要があります。
- 私たちは、町に関わる「人」と、そこから生まれる「営み」こそがブランドの資産そのものであると捉えます。とりわけ「学び」と「挑戦」を核に、一人ひとりが知識や技能を最大限に発揮し、躍動できる町を目指します。
- このブランドの方向性を実現するため、町は人材の育成や、活躍の舞台となる場所づくりなどを重点プロジェクトとして位置づけ、町を挙げて推進していきます。暮らし・学び・挑戦がつながり、人の活動が絶えずまちの価値を高めていく。そんな双葉町ならではの姿を、町のブランドとして確立し、発信していきます。

ブランドの柱となる資産

学びのフィールド

- 新たに整備する教育施設や駅前の公共施設を核に、学校と地域の学びをつなぎ、「文教のまち」をひらく。
- 教育施設は、地域にも開かれた拠点としてグローバルな学びを軸に人材を育て、駅前の公共施設は、生涯学習の機会を通じて関心や学びを深め、自分らしい活動や発信につなげていく。



「人」と「その営み」が双葉町の最大の価値

挑戦のフィールド

- 双葉だからこその多様な挑戦をまち全体で後押しする。
- 旧東邦銀行を活用したスタートアップ拠点やFUTAHOMEを起点に、個人の「やってみたい」から事業創出までをつなぎ、中野地区復興産業拠点では企業の幅広い事業の実装・展開を支える。
- 試行錯誤を歓迎する伴走体制を整え、挑戦が次の挑戦を呼ぶ文化を育てていく。

これからの暮らしのイメージ(土地利用ビジョン)

- 各エリアの特性を活かし、それぞれの場所ならではの暮らしの姿が育まれている状態を目指します。

暮らしの拠点(駅西・駅東地区)

双葉町の生活文化を継承し、暮らしの機能が集まる、歩いて暮らせるまちづくり

- 駅西・駅東地区それぞれの特性を活かしながら、暮らしを支える要素が相互に支え合うことで、暮らしに必要な機能が身近にそろい、歩いて巡るなかで人やまちとのつながりを感じられる、心地よい暮らしが広がることを目指します。

歩いて巡るなかで人の営みとの出会い

買い物や飲食、公共サービス、個性豊かなお店との楽しい出会い



若者や町民が自らの趣味や特技を生かした小さな挑戦



学びあるいきいきとした暮らし

地域の人との関わりの中で、子どもたちがいきいきと過ごし、大人も学びや交流に参加する、世代を超えたつながりのある日常



暮らしの拠点

継承・発展したまちなみ

自分らしい暮らし方が選べる多様な住まいが広がりつつ、震災前の記憶を受け継ぎながら新たな建物とも調和した、双葉らしい落ち着きとあたたかさのあるまちなみ



町内外への移動しやすさ

周辺市町とのつながりや移動のしやすさが暮らしを支え、通勤・通学や買い物、外出などにも無理なく対応できる、多様なライフスタイルに応じた便利な生活



これからの暮らしのイメージ(土地利用ビジョン)

- 各エリアの特性を活かし、それぞれの場所ならではの暮らしの姿が育まれている状態を目指します。

産業・交流拠点(中野地区復興産業拠点・産業拠点拡張予定エリア)

記憶・技術・人が集積しイノベーションが生まれるエリア

- 東日本大震災・原子力災害伝承館が有する震災の記憶と教訓、立地企業を持つ技術や知見、そして多様な人々の出会いと交流が重なり合うことで、新たな発想やビジネス、投資や交流の広がりを生むイノベーションが生まれ続けていく。



交流を通じたイノベーション

パークエリア

豊かな自然環境を活かした多様な活動と交流が生まれるエリア

- 双葉運動公園では、町民も来訪者も、運動やスポーツ、アウトドアやレジャーなどを自然の中で幅広く楽しむことができ、日常的な憩いから休日の活動まで、多様な過ごし方が広がっている。
- 復興祈念公園では、震災の記憶や教訓にふれながら、この地域が歩んできた歴史や復興への歩みに思いを馳せることができ、来訪者が双葉町や地域への理解を深める場となっている。



豊かな自然の中での憩い・運動

農業エリア

農作物の生産基盤を整備し、農業の担い手を育てる農業再生エリア

- 作物の生産基盤が整備され、農業者が意欲と希望を持って営みを続けている。
- 農業法人の参入も含めて、農業者が「儲かる農業」を目指し、作業効率や生産性の向上に日々取り組んでいる。



農に関わり続けられる環境の再生

土地利用の基本方針

- ワクワクする暮らし・学び・挑戦が日常にあふれる、双葉町で育みたい暮らしの実現に向けて、双葉駅周辺や中野地区復興産業拠点周辺に都市機能を集約し、周辺市町とのネットワークや地域の個性も意識しながら、コンパクトで質の高い都市構造の形成を図ります。
- その上で、避難指示の解除や将来の町内居住人口規模に応じて、市街地を段階的に発展させていきます。

拠点の形成・機能強化

- 駅前通りと旧国道の交差点周辺を、町の生活文化を継承し、復興をけん引する中心として位置付け、駅東・駅西地区を商業・医療・福祉・教育・学習などの多様な生活機能を集積させ、多くの人が行き交う「暮らしの拠点」の形成を目指します。
- 同時に帰還・移住促進の要となる産業・業務機能が集積し、世界の人々が震災の記憶と教訓を学べる「産業・交流拠点」の機能強化を図ります。

避難指示の早期解除

- 帰還困難区域の避難指示早期解除に向けた国への要望の継続と解除への道筋を加速させる生活基盤整備を進めます。

集落・農地・里山

双葉駅周辺
“暮らしの拠点”

住宅地

中野地区
復興産業拠点
“産業・交流拠点”

地域の個性を活かした土地利用

- 自然、文化、伝統等、地域が有する資源や特徴を活かした土地利用を図ります。

コンパクト・プラス・ネットワーク

- 双葉駅周辺を中心とした、各種の都市機能が集積した拠点の形成と、公共交通・徒歩・自転車と自動車などの総合的な交通ネットワークによる町内外の拠点間の連携・補完により、生活の質や町の価値・魅力を高める都市構造を目指します。

周辺市町

町内外の連携強化

- 町内の拠点を結ぶ都市軸を強化するとともに、幹線道路や公共交通により、防災や医療・福祉、観光交流等、様々な分野において周辺市町村との広域的な連携強化を図ります。

第3章 まちづくりの将来像・目指すまちの姿（土地利用構想）

土地利用構想図(エリアゾーニング)

目指すまちの姿や用途地域の指定状況などを踏まえてエリアを区分し、各拠点・エリアで計画的な土地利用を図ります。

常磐双葉IC周辺エリア
 ・避難指示解除の動向等を踏まえ、今後の土地利用の方向性を検討するエリア

まちなか再生エリア
 ・駅西・駅東地区の市街地形成を踏まえつつ、旧双葉北小学校の民間活用などを通じて居住の広がりを支えるエリア

暮らしの拠点(駅西・駅東地区)
 ・生活文化を継承し復興を牽引する、生活機能が充実した暮らしの拠点

農業エリア
 ・地区の風土等を活かした魅力的な農業振興を図るエリア

国道6号以東エリア
 ・町の2拠点間の間に位置し、両拠点の拡充と連携などの土地利用のポテンシャルがあるエリア

産業・交流拠点(中野地区復興産業拠点・産業拠点拡張予定エリア)
 ・働く・学ぶ・訪れる人々により、にぎわいと地域経済を牽引する拠点

パークエリア
 ・緑や水辺などの自然環境を活かしたスポーツ・レクリエーション活動や、復興折念公園来訪者との交流が広がるエリア

国道6号沿道エリア
 ・町民の生活に資する商業や生活サービス施設の立地を促進するエリア

まちなか再生エリア
 ・駅西・駅東地区の市街地形成を踏まえつつ、旧双葉南小学校や清戸迫横穴墓などの地域資源を活かし、学びの広がりを支えるエリア

特定帰還居住区域 ● 令和8年度中避難指示解除予定 ●
 ● 上記以外の特定帰還居住区域 ●
 ・帰還を希望する住民の帰還に向け、2020年代をかけて特定帰還居住区域の避難指示解除を進めるエリア。
その他帰還困難区域 ●

令和8年度中避難指示解除予定

復興シンボル軸



〰〰〰 広域連携軸
 〰〰〰 都市軸

※ 特定帰還居住区域及びその他帰還困難区域は令和8年3月時点のものです。区域は避難指示の解除に伴い変更されることにご注意ください。

参考：町域全体マップと帰還困難区域

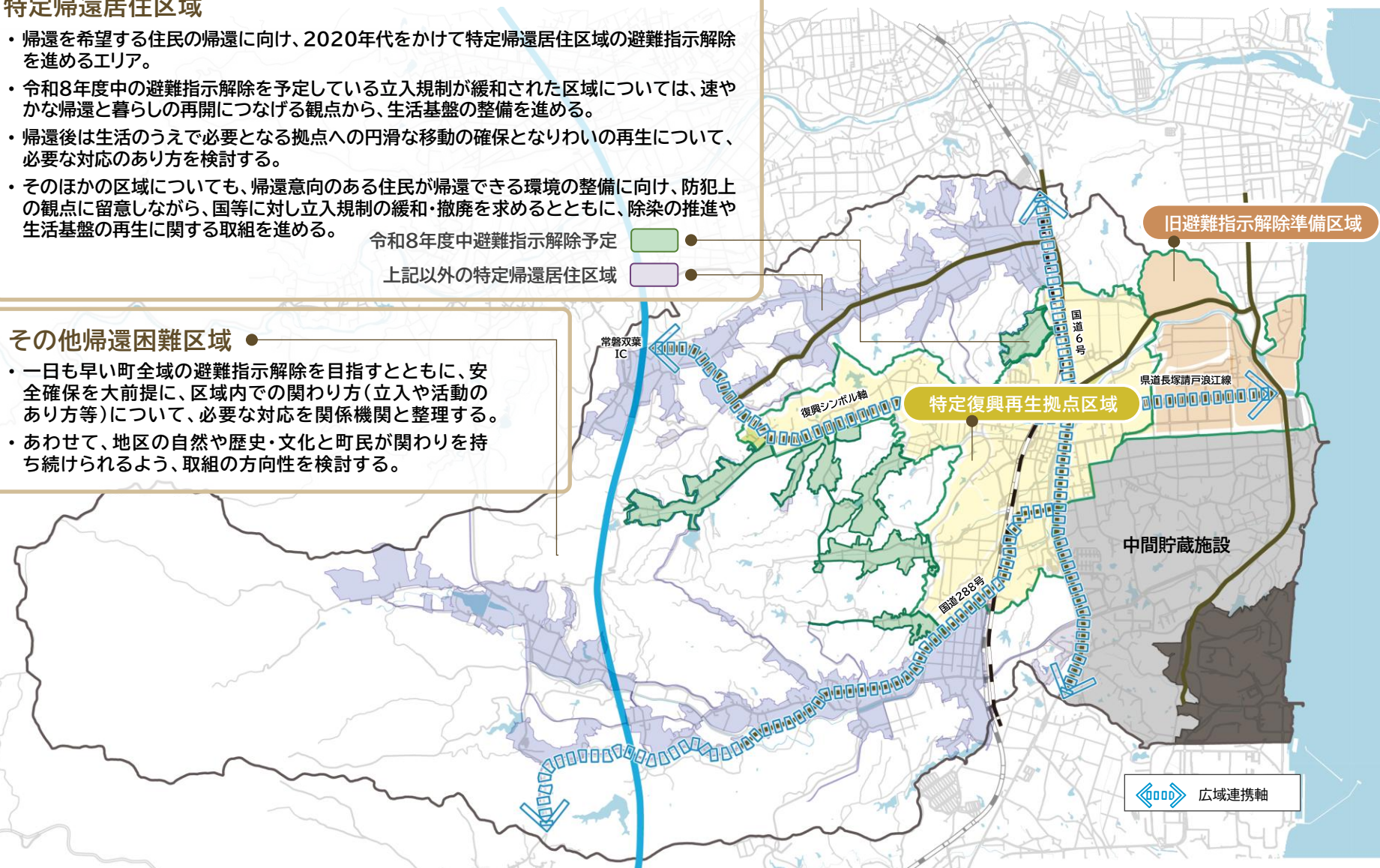
特定帰還居住区域

- ・ 帰還を希望する住民の帰還に向け、2020年代をかけて特定帰還居住区域の避難指示解除を進めるエリア。
- ・ 令和8年度中の避難指示解除を予定している立入規制が緩和された区域については、速やかな帰還と暮らしの再開につなげる観点から、生活基盤の整備を進める。
- ・ 帰還後は生活のうえで必要となる拠点への円滑な移動の確保となりわいの再生について、必要な対応のあり方を検討する。
- ・ そのほかの区域についても、帰還意向のある住民が帰還できる環境の整備に向け、防犯上の観点に留意しながら、国等に対し立入規制の緩和・撤廃を求めるとともに、除染の推進や生活基盤の再生に関する取組を進める。

令和8年度中避難指示解除予定  ●
上記以外の特定帰還居住区域  ●

その他帰還困難区域

- ・ 一日も早い町全域の避難指示解除を目指すとともに、安全確保を大前提に、区域内での関わり方（立入や活動のあり方等）について、必要な対応を関係機関と整理する。
- ・ あわせて、地区の自然や歴史・文化と町民が関わりを持ち続けられるよう、取組の方向性を検討する。



※ 特定帰還居住区域及びその他帰還困難区域は令和8年3月時点のものです。区域は避難指示の解除に伴い変更されることにご注意ください。

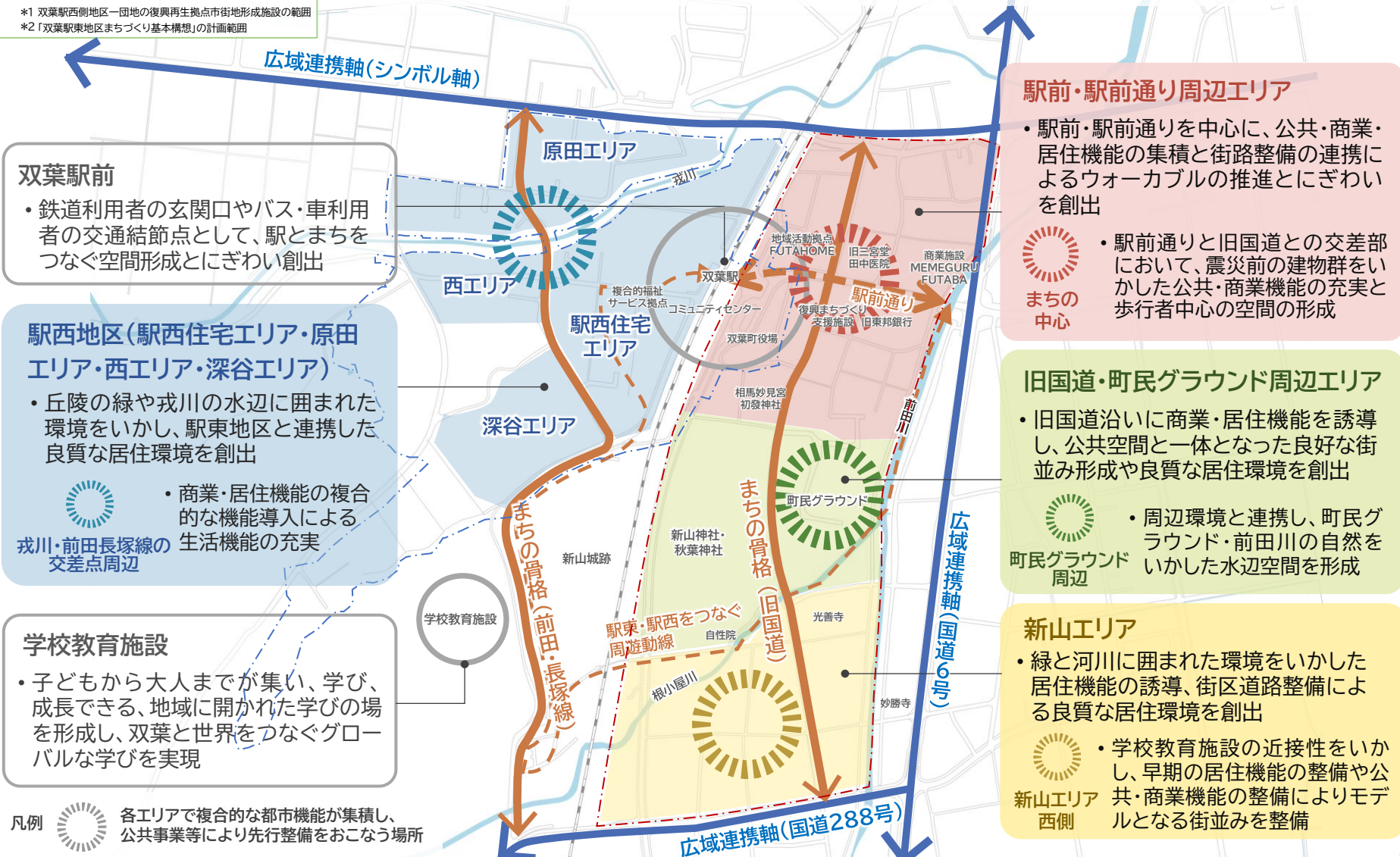
土地利用構想図 (暮らしの拠点詳細)

双葉町の生活文化を継承し、暮らしの機能が集まる、歩いて暮らせるまちづくり

- ・ 駅西・駅東地区は「暮らしの拠点」として、公共・商業・居住機能が集まり復興をけん引する「まちの中心」の整備や、各エリアをつなぐ「まちの骨格」を軸とした段階的な市街地形成を着実に進め、暮らしの機能が集まる歩いて暮らせるまちづくりを進めます。
- ・ 双葉町の生活文化や自然・歴史資源をいかした空間や、帰還住民・移住者・来訪者が日常的に交流できる場の充実により、地域に愛着を持って住み続けたいくなるまちづくりを進めます。

暮らしの拠点

- 駅西地区*1 駅西住宅/原田/西深谷エリア等
 - 駅東地区*2 駅前・駅前通り周辺/旧国道・町民グラウンド周辺/新山エリア等
- *1 双葉駅西側地区一団地の復興再生拠点市街地形成施設の範囲
*2 「双葉駅東地区まちづくり基本構想」の計画範囲



双葉駅前

- ・ 鉄道利用者の玄関口やバス・車利用者の交通結節点として、駅とまちをつなぐ空間形成とにぎわい創出

駅西地区(駅西住宅エリア・原田エリア・西エリア・深谷エリア)

- ・ 丘陵の緑や戎川の水辺に囲まれた環境をいかし、駅東地区と連携した良質な居住環境を創出

- ・ 商業・居住機能の複合的な機能導入による生活機能の充実
- 戎川・前田長塚線の交差点周辺

学校教育施設

- ・ 子どもから大人までが集い、学び、成長できる、地域に開かれた学びの場を形成し、双葉と世界をつなぐグローバルな学びを実現

凡例 各エリアで複合的な都市機能が集積し、公共事業等により先行整備をおこなう場所

駅前・駅前通り周辺エリア

- ・ 駅前・駅前通りを中心に、公共・商業・居住機能の集積と街路整備の連携によるウォークアブルの推進とにぎわいを創出

- ・ 駅前通りと旧国道との交差点において、震災前の建物群をいかした公共・商業機能の充実と歩行者中心の空間の形成

旧国道・町民グラウンド周辺エリア

- ・ 旧国道沿いに商業・居住機能を誘導し、公共空間と一体となった良好な街並み形成や良質な居住環境を創出

- ・ 周辺環境と連携し、町民グラウンド・前田川の自然をいかした水辺空間を形成

新山エリア

- ・ 緑と河川に囲まれた環境をいかした居住機能の誘導、街区道路整備による良質な居住環境を創出

- ・ 学校教育施設の近接性をいかし、早期の居住機能の整備や公共・商業機能の整備によりモデルとなる街並みを整備

復興のさらなる加速に向けた重点エリアと今後の検討エリア

- 本町の復興を大きく加速させるポテンシャルを有している国道6号以東エリアと、今後の復興の進展に応じて土地利用のあり方を見ていく常磐双葉IC周辺エリアを示します。
- これらの土地利用については、関係機関や地権者等と調整しつつ、双葉町の復興状況や社会・経済情勢の変化、避難指示解除後の動向等を踏まえながら、中長期的な視点で検討していきます。

国道6号 以東エリア

ポテンシャル

- 駅西・駅東地区と中野地区復興産業拠点の中間に位置し、両拠点の機能拡充や連携を支える重要なエリアです。
- 町有地が多く、今後の復興の進展や民間プロジェクトの具体化に応じて、柔軟に土地利用を検討しやすい。

土地利用方針

- 拠点形成の進展や各種プロジェクトの具体化を見据え、復興の加速に資する土地利用を図ります。

常磐双葉 IC周辺 エリア

土地利用の方向性

- 常磐自動車道に近接する広域交通上の特性を有するエリアです。
- 周辺の避難指示解除の動向や土地利用条件等を踏まえながら、本町の復興の進展に応じて、今後の土地利用のあり方を検討していきます。

町有地利活用方針 土地利用構想に関連する、町有地の利活用のあり方について中長期的方針を位置づけ

- 町有地等の公有資産は、町民が必要とするサービスの提供や地域課題の解決、居住人口の増加に資する都市経営上の重要な経営資源である。
- また、復興の進展に伴う国・県からの交付金などの支援の縮小も見据え、将来にわたり必要なサービスを維持するため、歳入確保と維持管理負担の適正化を含む経営的視点で利活用を検討する。
- その際、町内の需要だけでなく近隣都市を含む広域的な視点から、将来の都市機能・地域社会のあり方を見据え、以下のとおり全庁で基本的な考え方を揃えて進める。

町有地利活用の基本的な考え方

① 全庁横断的視点での資産活用

- 全庁横断的な視点で事業と資産活用の状況を評価・検証し、最適な維持管理手法の構築、施設の共同利用・複合化、新規整備に着手する優先順位付けなどにより資産活用の効率性をさらに向上させる。

② 資産保有量の最適化

- 将来の人口動向・サービス需要を見据えつつ、今後も保有すべき資産規模とそれに見合った適切な管理運営コストを把握し、維持管理費の低減・平準化と管理運営コストの縮減を図る。

③ 将来像実現を推進する柔軟な資産活用

- 町有地等の公有資産は、将来像の実現や住民サービスの維持・充実、居住人口の増加に資する形で、民間の投資・知見・運営力を戦略的に取り込む。
- 貸付・売却に限らず、定期借地、暫定利用、PPP/PFI、運営委託・指定管理等の手法を組み合わせ、財政負担の抑制と歳入確保、サービス品質の向上を同時に図る。

第3章 まちづくりの将来像・目指すまちの姿（将来目標人口）

- 将来にわたって活力ある双葉町を維持していくためには、帰還や移住によって町内居住人口が着実に増えていくことが重要です。
- 今後、町内で安心して暮らせる環境や、学びと挑戦があふれる日常を整えることで、計画期間である今後10年間(2037年)において、町内居住人口700人程度を目指します。
- 長期的には中野地区復興産業拠点の拡張に伴う従業者やF-REIでの研究に従事する研究員等の居住により、町内居住人口を1,500人程度を目指します。
- さらに、原子力発電所の廃炉関連業務に従事する人材の居住に加え、人とその営みを大切にする町としてのブランドを確立することで、今後の波及的な展開を促し、人口目標の早期達成と、その先のさらなる町内居住人口の増加につなげていきます。



町内居住人口の増加を支える主な取組

行政主導による具体的な取組

働く場を広げる

- 中野地区復興産業拠点への企業立地
- 中野地区復興産業拠点の拡張
- 農業エリアでの営農再開
- 駅周辺での店舗・事業所の起業・創業

教育環境を整える

- 教育施設の整備

周辺市町村での復興の動き

- F-REI・双葉郡における中核的病院の整備

+

今後の波及的な展開

- 廃炉関連業務に従事する人材の移住
- 産業団地以外での産業や大学・研究機関等の立地 等

住まいの供給

- 目標人口を踏まえた住宅戦略に基づき、町による公的住宅の整備・民間賃貸・戸建て住宅の供給促進

参考:将来目標人口算出の考え方

- ・ 帰還者人口、移住者人口の推計に加え、新学校整備や中野産業団地などの既に事業化されている事業、さらには今後見込まれる事業などによる移住者人口を積み上げることで算出する。

	推計した 町内居住人口
新学校施設整備に伴う移住者人口(～令和18年度)	166人
中野産業団地への企業立地に伴う移住者人口(～令和18年度)	197人
商業関連の取組による移住者人口	22人
双葉地域における中核的病院開院による移住者人口(～令和18年度)	33人
農業エリアでの就業に伴う移住者人口	49人
帰還者人口(令和17年)	153人
その他移住者人口(高齢者)	35人
移住者人口(令和7年)	104人
合計(四次計画期間内(～令和18年度))	759人
新学校施設整備に伴う移住者人口(令和19年度～)	136人
新規産業団地整備に伴う移住者人口(令和19年度～)	295人
双葉地域における中核的病院開院による移住者人口(令和19年度～)	83人
F-REIによる移住者人口	231人
帰還者人口(令和19年度～)	50人
合計(長期(令和19年度～))	1,554人